

第3節 静岡県における弥生時代・古墳時代の 木製農耕具

- 1 はじめに
- 2 静岡県の木製農耕具の出土遺跡
- 3 鋤の分類試案
- 4 静岡県内の鋤の器種とその組成の変化
- 5 まとめ

1 はじめに

静岡県内では、近年低湿地性の遺跡の発掘調査が進み、地下水位の高いこれらの遺跡から多数の木製品が出土している。特に静清バイパスの建設に伴う関連遺跡では水田遺構を多く検出しており、また、これらの遺構より水田遺構と密接な関係をもつ木製農具が出土している。遺構に関しては、様々な角度より検討が加えられて来ている。一方で木製農具の資料も蓄積されつつあるが、その地域性の色濃い故か、また出土遺跡が偏在するが故か、共通の土俵で検討、分析、整理されることが少なかった。

ここでは静岡県内の遺跡から出土した木製農耕具を集成し、検討してみた。弥生時代、古墳時代の農耕具とは鋤と鋤を示す。当該時期の鋤と鋤に関しては出土資料も蓄積され、各器形の系譜や器種組成も把握できる段階に来ている。小文では鋤の分類の整理をまずしてから、静岡県内出土の鋤鋤をこの分類に当てはめ、全国の鋤鋤の形態変遷を瞥見しながらその消長を確認していきたい。

2 静岡県の木製農耕具の出土遺跡

今回、県内の鋤鋤を集成し年代順に並べる際、当該時期を以下の5期に大別した。当然、土器の編年当てはめなのであるが、県東・中・西部で必ずしも形式名が横並びになるわけでもなく、研究者間の年代観の相違もあって、若干不明確な時代区分になることは了解願いたい。まず 1) 弥生時代中期後半は現時点で明確な水田遺構、木製農具が確認できる最も古い時期である。水田稲作が体系化され、完成された技術で導入された時期、「初期農耕」の時期である。ただ西部において国鉄工場内遺跡、角江遺跡などで中期の木製農具が瓜郷式土器を伴っており、畿内第Ⅲ様式併行の時期も含めて考えたい。あくまでも三河で長床式、遠江で白岩の新しい段階、駿河で有東式、南関東でいう宮ノ台式の時期が中心である。2) 弥生時代後期前半は、県下では広域に確認できる伊場式(県西部)、登呂式(県中・東部)の時期である。後期の中でも、所謂古式土師器を伴わない古い時期と言える。瀬名遺跡、長崎遺跡など静清平野の遺跡の中には、この登呂式の時期と次の古式土師器を伴う時期が明確に分層できる場合が何ヶ所か指摘できる。(瀬名遺跡の2・3区では、この2時期の層の間に砂層が挟まれているという良好な出土資料がある。) 3) 弥生時代後期末から古墳時代前期までは、弥生時代後期の土器の中に古式土師器が混在し、S字状口縁甕が伴出する時期である。静清平野で確認できる水田遺構では、杭列・横板・敷板の構造を持つ杭列畦畔が確認できる時期である。これらの畦畔内からは多数の木製品が出土しており、必然的に木製農具の資料も、この時期には他の時期に比して数、種類とも豊富である。4) 古墳時代中期であり、所謂和泉式土器を伴う時期である。また川合遺跡のSR1101内出土の木製品もこの時期に含めた。土師器では宮之腰Ⅱ式、陶器編年のTK208型式の時期まで含んでいる。5) は古墳時代以降で、歴史時代(奈良時代)の要素がない時期である。この時期以降、木製農具の出土点数は極端に減り、また時期を限定して考えることが出来るその点数は数点に留る。歴史時代に入ると、木製農耕具の形態変遷、ましてやその器種組成を検討出来る資料は今のところないのが実状である。以上の5

期に出土木製農耕具を当てはめたが、中には時期幅を限定できない資料もあり、それらは今回除いた。

次にこれらの木製農耕具が出土した遺跡のうち主なものについて、その位置、立地条件、農耕具の出土状況について概観しておく。

戦後まもなく日本考古学協会主導のもと、登呂遺跡（静岡市）が調査された。1947年から4年間の調査で水田跡と集落跡が検出された。木製品は奈良県唐古遺跡と並び評される弥生時代の生活文化を知る重要な資料として注目された。容器類を中心とする様々な日用品、鍬・鋤・臼・竪杵・ヨコヅチ・田下駄などの農具、剣・琴などの祭祀具、工具、建築材など多数にのぼった。これらは水田域の杭打ちの畦畔付近より出土したものが大半である。山木遺跡（韮山町）も1950年に第1次調査が行われ、その後1984年の第8次に至るまで調査が実施されている。狩野川の支流の堂川が平野部に流れこむ低湿地に立地し、住居跡、水田の畦畔、水路が検出されている。やはりこの畦畔内や水路跡より多数の木製品が出土した。特に1次2次の調査では鍬・鋤・エブリ・竪杵・田舟・田下駄等の農具をはじめ、刳物容器、梯子・ネズミ返し等の建築材等の木製品が確認された。大半は古墳時代前期に属すると考えられ、ここでは弥生時代後期～古墳時代前期の幅で考えたい。白岩遺跡（菊川町）は菊川の支流、古西方川によって形成された自然堤防の微高地上にある。1966年の調査でDトレンチ内で農具を中心とする木製品が多数出土している。中期Ⅱ（東三河の下長山式土器）の土器を共伴した。木製品は鍬、刳物容器、弓等が出土している。以上3遺跡は戦後まもなくより調査が開始され1950年代から木製農具の存在が意識された遺跡である。1970年代に入ると山木遺跡の3次以降の調査が進み、1976年以降には浜松市の国鉄工場内遺跡（梶子遺跡）が始まり、特に1982年の調査で砂堤列から北の低地に下る包含層より瓜郷式土器と伴に、鍬・木鎌等の木製品が出土した。伊場遺跡（浜松市）では1968年の2次調査以降、1973年の7次調査までの報告が木製品に限っては1978年に刊行されている。大溝内より多数の木製品が確認されている。鋤、鍬、竪杵、単甲状木製品は弥生時代後期前半のものである。また鍬・鋤・大足・エブリ・馬鍬・鎌・竪杵などの農具、そして漁具、運搬具、編具、機織具、俎箸などの厨房具、曲物・刳物・挽物などの容器、弓・鞍などの武器・武具、人形・馬形・舟形・絵馬・斎串などの祭祀具が古墳時代以降の木製品として報告されている。これだけの器種のバラエティーは時期幅があるという理由からも窺えるが、これほど多岐に亘る木製品を一遺跡で出土したことは注目に値する。分類及び用途の限定にも民具学の成果が援用されており、学際的な木製品分析を展開した。⁽²⁾1978年に調査された川の丁遺跡（藤枝市）は志太平野北部の丘陵に沿う低湿地で、河川跡、住居跡が確認されている。弥生時代後期～古墳時代前期の旧河道より二又鍬、田下駄、剣形、ヨコヅチ、刳物などの木製品が出土している。

1980年代に入ると、地下水位の高い低湿地性の遺跡の発掘が次々に行われ、木製品も多数出土し、資料が蓄積されていった。御殿・二之宮遺跡は磐田原台地の南端で平野と接する低湿地であり、1978～1985年にかけての4次にわたる調査が行われた。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝を検出し、二又鍬・鋤・フォーク状木製品などの農具などが出土している。また1989年の第5次調査では、土坑内より一木鋤・二又鍬が出土している。小黒遺跡（静岡市）は静岡平野南部、低い丘陵が低湿地と接するところで、微高地上には集落が、低湿地には水田が広がった。1982年には調査され、低湿地部より多又鍬・田下駄などの農具、容器、建築材、琴・剣形・舟形・人形等の祭祀的な木製品が確認されている。神明原・元宮川（大谷川）遺跡（静岡市）は、1983年～1985年にかけて有度丘陵西端を南北に流れた旧河道の調査が主であったので、多量・多数の木製品が出土した。特に土製の祭祀具と一緒に旧流路内より木製の人形・馬形・刀形・舟形・斎串・絵馬等が多数出土したため、祭祀遺跡として有名になった遺跡である。弥生時代後期の鍬から特に古墳時代後期～奈良時代にかけての木製品は祭祀遺物に留らずに、多種多様な木製品が確認できた。鍬・鎌・ヨコヅチなどの農具、刳物・曲物・挽物などの容器のほか梯子、下駄、弓など伊場遺跡に匹敵する程の量と種類であった。1988年には、雌鹿塚遺跡（沼津市）という浮

島沼の中央部に近い低湿地遺跡が調査された。弥生時代後期の住居跡と溝状遺構等が検出され、やはり多数の木製品が出土した。羽板まで復元できる鳥形木製品・剣形・舟形・陽物等の祭祀具があり、その他多又鍬・広鍬・小型鍬・鋤・ヨコヅチ・田下駄などの木製農具、刳物などの容器、建築材が出土した。

静清バイパス関連の調査が1984年から本格的に開始され、静清平野の低地部も深く発掘調査されることになった。特に木製品を多数確認できた遺跡として、川合遺跡、長崎遺跡、瀬名遺跡、池ヶ谷遺跡を挙げることができる。川合遺跡は静岡平野の北東部で長尾川の東に位置し、洪水痕跡が何度か確認できる低湿地性の遺跡である。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての包含層及び流路より、多又鍬・小型鍬・鋤・田下駄などの農具、刳物容器、建築材が出土している。また、旧流路 S R 1101 内から 5 世紀末の土器と伴に多数の木製品が確認されており、古墳時代の木製品で時期が限定できる貴重な資料である。この流路内より後述する鍬の一群の他、鋤・鎌・竪杵・ヨコヅチ・編錘などの農具、舟形・刀形・剣形・斎串などの祭祀具などが出土している。池ヶ谷遺跡（静岡市）は賤機丘陵の東山裾にあり、麻機低地との接点にある遺跡であり、条里制地割が明瞭に確認できている。その畦畔は杭が打たれていたり、多数の木製品が埋め込まれており、平安時代の鍬・大足・輪カンジキ型田下駄・鎌などの農具が出土している。下層の弥生時代の水田跡からは静清平野においては普遍的に出土する板状の田下駄が多数出土している。長崎遺跡（清水市）は清水平野の北西部の巴川流域低湿地に位置し、弥生時代後期～古墳時代前期の水田跡からやはり多数の木製品が出土している。鍬・鋤・田下駄・ヨコヅチなど、静清平野の当該期における一般的な木製農具を揃えている。瀬名遺跡（静岡市）については、以上の県下の木製品農耕具検出の歴史の中で特筆に値する 2 点を挙げておく。まず弥生時代後期～古墳時代前期にかけての膝柄装着の又鍬の資料が揃っていることである。そして古墳時代中期の完形の諸手鍬の出土である。内容については後述する。また農耕具以外の木製品の特色は別の場所で詳述しているので、ここでは記さない。

以上が1993年現在、県内で確認できる木製品を多く出土させた主な遺跡である。1993年現在調査中である木製品が出土している遺跡として、岳美遺跡（静岡市）、上土遺跡（静岡市）、角江遺跡（浜松市）などがある。特に角江遺跡は、既に弥生時代中期後半から後期にかけての多数の木製農耕具が出土しており、その器種組成は今まで県内で確認されているどの遺跡のものより揃っていることが予想される。また臼・竪杵などの農具、刳物・高杯などの容器、弓、琴などの弥生時代の木製品が確認されている。

3 鍬の分類試案

農耕具に限らず、出土遺物の命名、分類が研究整理されていくには、良好な一括資料に恵まれることが必要不可欠な条件であることは言うまでもない。木製農耕具に関して、良好な一括資料の出発点は唐古遺跡（京都帝国大学 1943）であり、その後登呂遺跡（日本考古学協会 1949、1954）の調査があり、戦後急激な開発事業に伴って低湿地、旧流路の発掘調査が行われていった。大中の湖遺跡の調査が、1964年～1966年に行われ、その調査結果を中心に、その他篠束遺跡（小坂井町教委 1961）、山木遺跡（菰山町 1961）等の資料を加えて、弥生時代木製農耕具を初めて体系的に検討したのが木下忠氏であった（木下 1966）。木下氏は機能を考慮に入れつつ、農耕具を「平ぐわ」「またぐわ」「すき」「ふぐし」「フォーク状木器」に大別した。形態を細分せずに、鍬の柄の装着角度を検討するなど、その後の形態的に細分類するその後の動向とは違う 1 歩を踏み出している。大中の湖遺跡の成果を受け、本格的に弥生時代（5）の木製農耕具を分類したのが黒崎直氏であった（黒崎 1970）。その後体系的にまとめられる農耕具の分類の根幹がここに出揃っている。「広鍬」「狭鍬」「丸鍬」「又鍬」と鍬を分け、鋤は「長柄鋤」「着柄鋤」「スコップ」に分けている。そして、弥生時代を 4 期に分け（Ⅰ期弥生時代前期、Ⅱ期弥生時代中期前半、Ⅲ期弥生時代中期後半、Ⅳ期弥生時代後期）、当時としては限定された資料の中で、その変遷を捉えようとした。この時期、黒崎氏のⅢ期、Ⅳ期の資料があまりなく、変遷を追える段階ではな

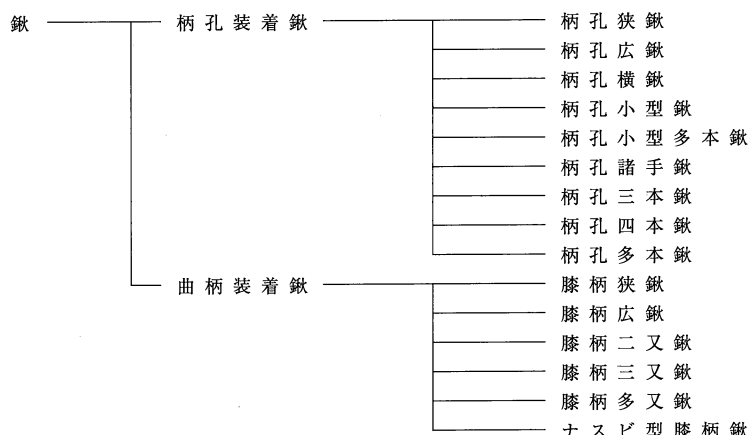
かった。その後、70年代に入ると、里田原遺跡（長崎県 1974）、瓜生堂遺跡（瓜生堂遺跡調査会 1972）、南方遺跡（岡山市 1971）、納所遺跡（三重県教委 1973）、下市瀬遺跡（岡山県教委 1973）、上東遺跡（岡山県 1974）、池上・四ツ池遺跡（第2 阪和国道内遺跡調査会 1970）等の資料が報告され、それらを受けて、根木修氏が縄文時代からの流れも考慮に入れつつ検討している（根木 1976）。鍬は「A引鍬」と「B打鍬」とに大別している。「引鍬」とは、「着柄角度は鋭角的で60度を境に前後15度範囲で着柄されている」鍬で(イ)引鍬(ロ)丸鍬(ハ)特殊の引鍬に分けている。また「打鍬」とは「着柄角度は60～90度で鍬身15cm以下と相対的に幅狭に作られている」鍬で(イ)打鍬(ロ)打引鍬(ハ)馬鍬とに分けている。鍬を柄の装着角度を中心に打鍬と引鍬とに分けることは、民具研究の分類の中核である機能分類に近いもので、形態を機能的に類別できる可能性を指摘したものである。しかし、民具研究者が現行の民具例の鍬を機能分類をしようとしても出来ずにおり、用途が聞き取れる民具においても、その柄の装着角度や身の幅で打ち鍬と引き鍬を明確に分離できない現今、この分類の有効性は完全とは言いきれないものがある。考古資料を単に機能分類にだけ注視して分類することの限界を感じさせる。⁽⁶⁾鋤はA長柄鋤、B踏鋤、Cスコップ状木器、Dフォーク状木器に分けている。Bの「踏鋤」とは「身と柄が別木で作られ、組み合わせて使用される」鋤であるが、この組み合わせ鋤を「踏鋤」という命名のもと「浅耕用」としている。「着柄状況」「強靱度」から導き出せるとするが、後述するように組み合わせ鋤には、土木用具としての色彩が強いことを考え合わせ、この機能に関する説には肯首しがたいものがある。

現在、考古資料の木製農具を分類する上において、最も基本となる分類は、1985年に黒崎直氏が示した分類（黒崎 1985）であろう。拾六町ツイジ遺跡（福岡市教委 1983）、菜畑遺跡（唐津市教委）、板付遺跡（福岡市教委 1981）等、九州の出土資料も増え、全国的に鳥瞰できる資料が揃ったところで分類を試みている。「狭くわ」「広くわ」「又くわ」「横くわ」に大別し、更に、その中を、着柄角度、刃幅、平面形など諸要素より細分を試みている。これらの分類の上に形態的変遷をおさえ、更に機能にまで言及している。拙文での分類もこの黒崎氏の分類の延長上にあることは言うまでもない。

山田昌久氏は『新保遺跡Ⅰ』の中で、新保遺跡出土の木製品農耕具190点を整理、分類している。大きくは広鍬、狭鍬、横鍬、又鍬、三又鍬、長柄鋤、着柄鋤、鍬、農具膝柄、農具直柄と分けている。さらに、広鍬ならa類～h類まで8つに細分している。その形態的特徴も各々記述している。山田は北九州、近畿、東海、関東、各地方の鍬鋤の形態も検討し、「弥生時代中期後半以降の鍬鋤類の動向は(a)近畿－北陸の繋がり」と(b)東海－(中部)－北関東の連絡とのふたつの大きな流れを示しているらしい。」と指摘している。この報告書内では、新保遺跡出土の鍬鋤しか分類していないが、『シンポジウム日本における稲作農耕の起源と展開』（山田 1988）の資料で「木製農耕具の形式分類」として、全国の遺跡出土の鍬鋤を念頭において、模式図で分類を示している。「広鍬」はA～Uまで実に21に細分している。細分の基準はこれがシンポジウムの資料という性格上か明記されていない。また、「時期差、地域差別木製農耕具」の表から地域差である組成の違いは了解できても「時期差」は読みとるに困難である。

短いレポートではあるが、上原真人氏は畿内の弥生時代、古墳時代の鍬鋤を集成している過程で得られた分類を明示している。鍬は身と柄とから成る故、「身の材質、柄の形態と着柄法、身の形態の3つの属性に基づいて」分類することが可能であるという。身の材質は当該期においてはすべて木製である木鍬が大半である故問題はない。着柄法で大別すると「直柄鍬」と「曲柄鍬」に分けることができる。また身の形態は平鍬と又鍬に大別でき、平鍬は広鍬、狭鍬、横鍬に分けれる。直柄の広鍬はⅠ式よりⅦ式まで細分できる。この分類に基づき、直柄平鍬、曲柄鍬の各々の変遷を整理している。機能にも言及しながら、器種組成、形態変遷をまとめている。ただ、分類上、柄の装着法と身の形態の各々の分類基準の優先が不明で、「身の材質」「柄の形態と着柄法」「身の形態」の3つの属性を同時に念頭に入れることは難しい作業である。

以上、諸氏の木製農耕具の分類を念頭に入れつつ、東海地方で出土した木製農耕具の実態を把握するに相応しいと考えられる分類を考えてみたのが次の表である。



第33表 鍬の分類案

まず、身と柄の結合方法で柄孔装着の鍬と曲柄装着の鍬とに大別する。身に孔を穿って、直柄を挿入し固定するのが柄孔装着の鍬である。その後、身が刃先が鉄器化した風呂鍬⁽⁷⁾へ、そして身全体が鉄器化した鉄鍬になっても、この身と柄との結合方法是不変であり続けている。現行の鍬のうちでこの結合方法をとらないものは、数える程しかないのも事実である。一方、曲柄装着の鍬とは身に緊縛用の棒状の突出部をつくっておき、そこに膝柄または反柄を植物の繊維等で縛り付けるものである。膝柄とは枝材の分岐部分を利用し、カギ状に屈曲した鍬柄であり、反柄とは、カギ状に緊縛部が屈曲せず、柄が反ったまま端部に至り、端部には緊縛のための突起を設けているものである。この装着の鍬はナスビ型鍬の消滅とともに終焉を迎えると考ええる。平安時代後半には消滅しているのだろうか、中世以降現在に至るまで、この装着法は絶えて久しい⁽⁸⁾。これは身が全て鉄器化することで、身と違う材質の木質の柄には緊縛しただけでは固定できなかった事情が消滅を招来したものである。

柄孔装着の鍬は狭鍬、広鍬、横鍬、小型鍬、小型多本鍬、諸手鍬、三本鍬、四本鍬、多本鍬に分けることができる。

狭鍬はやはり黒崎氏が定義付けるように、刃幅10cm前後以下の鍬である。鍬全体の数の中で、狭鍬に属するものは少なく、組成全体の中でやはり特異な機能を持ったと考えられる。弥生時代中期の資料の中に、舟形隆起を削り出す狭鍬がある。一方着柄隆起を持たない狭鍬も確認できる。

広鍬はやはり黒崎氏によると、着柄隆起を外側に作る刃幅15~20cm前後の一般的な鍬を示す。黒崎氏はA~Fの6つに細分しているが、Fの「蟻じゃくり」の溝を持つものとしている鍬は平面形が台形を示すものと、平面形が有頭状になるものの2種があるため、このアリジャクリ溝を1つ下位の属性として整理した。広鍬は概ね4つに分けられるだろうか。1つは肩を斜めに切り落とし、平面形が台形をするものである。着柄のための舟形の隆起が外側に削り出されている。2つに平面形が基本的には台形であるが、柄孔付近の左右両側にくびれをつくり、有頭状にする広鍬がある。これも舟形隆起が外側につく。この2種の広鍬には、泥除け具を付ける仕組みをもつものとそうでないものがある。3つ目に平面形がバチ形になるものがある。これは明瞭な舟形隆起をもたない。柄孔付近をやや肥厚に削り出しているか、またはほとんど着柄隆起を持たないものもある。4つ目は平面が長方形を呈するもので、これは平面が台形になるものが明瞭な舟形隆起を持つものに対し、柄孔付近を肥厚にただけの隆起があるものと、全く隆起がないものとに分けることができる広鍬である。

横鍬は「身丈よりも刃幅の方が広い」(黒崎 1985) 鍬であり、木目が横位に走り、通常の木目が縦位に走る幅が縦全長よりも狭い鍬とは明瞭な差異を示す。平面形が丸または楕円のものと長方形を呈す

るものがある。東海地方では丸鍬と呼べる鍬は破片でしか確認できないが（朝日遺跡）、長方形を呈する横鍬は弥生時代を通じて確認できる。長方形の横鍬には着柄隆起のあるものとないものがある。

小型鍬は樋上昇氏が東海地方の鍬の器種の中でその名称を用い位置付けしたのが始めであろう。縦全長が10cm～15cm程、身幅も8cm～10cm程度の小型の鍬である。鍬としての機能をはたさないのではとの疑問もあるが、ここで確認できる小型鍬はすべてアカガシの柾目材を用いており、柄孔は他の柄孔装着鍬と同じ程度の径をもつことから、鍬の製作技術により作られていることは確かで、ここでは鍬とした。鬼虎川遺跡（大阪市）をはじめ、全国的に散見できる資料である。東海地方では、弥生時代中期、後期においては、特異な器型ではあるが、その消長を追うことができる鍬である。また、この小型鍬とほぼ平面積が近似値をしめす多本鍬が散見できる。四本が基本かとも思われるが、三本も確認できる（静岡市長崎遺跡）。

「諸手鍬」という名称は北九州における初期農耕の段階に導入された鍬で、身はエブリ状に長く、ほぼ中央に柄孔が穿たれ、身は緩やかに彎曲する。この器型の諸手鍬は北九州、畿内（東は三重県納所遺跡まで伝わる。）にかけ、やはり初期農耕の農耕具であった。この諸手鍬と形状が極めて類似する鍬が、静岡平野の遺跡の5世紀代の層より出土している（川合遺跡、瀬名遺跡）。この古墳時代中期の諸手鍬は片方の刃先にU字型の鍬先を装着する。この諸手鍬については後述するが、器型的には、この2つの諸手鍬は近似しているため、ここでは「諸手鍬」という同一の用語にした。現在の出土資料だけだと、近畿まで分布する初期農耕の諸手鍬は、一度そこで途絶えると考えられてもいように、東海、北陸以東では確認例が少ない。ただ新保遺跡から弥生時代後期の例としてこの後者の諸手鍬と同タイプと思われるものが出土している。今後出土資料の増加でこの諸手鍬の2つの系譜がつながるのか、また全く別の系譜なのかが判別できるであろう。現段階では機能を考え合わせ、形態的に近似しており、同系譜の可能性があるため、ここでは「諸手鍬」と総称したい。

柄孔装着の鍬において刃先が分かれるものは、フォーク状に先が尖り、刃先の断面は方形または円形になる。これらは又鍬と呼ぶより、多本鍬と呼びたい。後述の曲柄装着の鍬においては分かれている刃先が幅広で薄く作られており、多又鍬と呼ぶに相応しい形状を示している。この柄孔装着鍬においては三本、四本、多本鍬に分けて考えたい。

曲柄装着鍬には狭鍬、広鍬、二又鍬、三又鍬、多又鍬、ナスビ型鍬に分けることができる。ナスビ型鍬を除けばすべて柄は膝柄になると、現段階では言えるであろう。曲柄装着鍬と総称したのは膝柄を装着する鍬の系譜⁽¹⁰⁾の中で登場したナスビ型鍬に反柄が装着されるようになり、ナスビ型鍬⁽¹¹⁾に関してはその身の形状からだけでは柄が膝柄になるのか反柄になるのか不明であるという事情があったからである。膝柄狭鍬とはやはり柄孔狭鍬と同様に身幅が10cm～15cmと狭く、身が長い形状のものである。この膝柄狭鍬はその着柄軸の形状により2つに分けて考えることができる。1つは着柄軸の外側が有段状に上端部と中位部に緊縛用の段差を削り出しているものと、もう1つは、ただ着柄軸の上端を有頭状にしてあるものである。膝柄広鍬は身幅が20cm前後または20cm～25cmと幅広のものである。身の形状は膝柄狭鍬のように定型化しておらず、平面形は多様である。下端の刃先に向かって幅広になる傾向があるものが多いのが特徴であろう。⁽¹²⁾

膝柄装着の二又鍬は身全幅が25cm～30cmとあり、身の長さは40cm～50cmと大型で刃厚は1cmに満たない薄い仕上がりである。中央縦に分岐の切り込みを入れているが、幅2cm～3cmと狭く、又鍬といっても、身に十分土がのる構造を示す。この二又鍬は東海、関東、南東北と広域に分布し、弥生時代後期に現れ、古墳時代初頭に盛期を迎え、古墳時代中期には見られないという特異な消長を示す鍬である。地域性を読みとる資料としては、重要な鍬である。膝柄装着の二又、三又、多又の鍬がある。これらの又鍬は前述の柄孔装着の多又鍬と違って、又の歯は幅があり、薄く作り出されている。膝柄装着で身が長

く、身幅が狭い長身の鍬がある。

曲柄装着の鍬の中に、「ナスビ型」の鍬がある。膝柄または反柄を緊縛しやすいように、着柄軸に突起を削りだしており、それが平面形で見るとナスビのヘタ状をなし、それより「ナスビ型」鍬と呼ばれる。畿内を中心に二又のナスビ型鍬が弥生時代後期に見られるが、静岡県下ではナスビ型の着柄軸を有する鍬は現段階ではU字型の鉄刃を装着する古墳時代中期以降のものしか確認されていない。石川条里遺跡（長野県）、新保遺跡（群馬県）では、二又のナスビ型鍬が出土しており、東海地方でも今後、U字型の鉄刃を装着しない無分岐のナスビ型鍬や二又のナスビ型鍬が確認できる可能性はある。ナスビ型鍬はU字型鉄刃を装着しない木鍬として無分岐のものと二又に分かれるものがある。それにU字型の鉄刃を装着するものを加えると三つに分けることができる。（全国的には三又のものもある。）

以上が北九州から南東北までの弥生時代、古墳時代の鍬を分類する試案である。

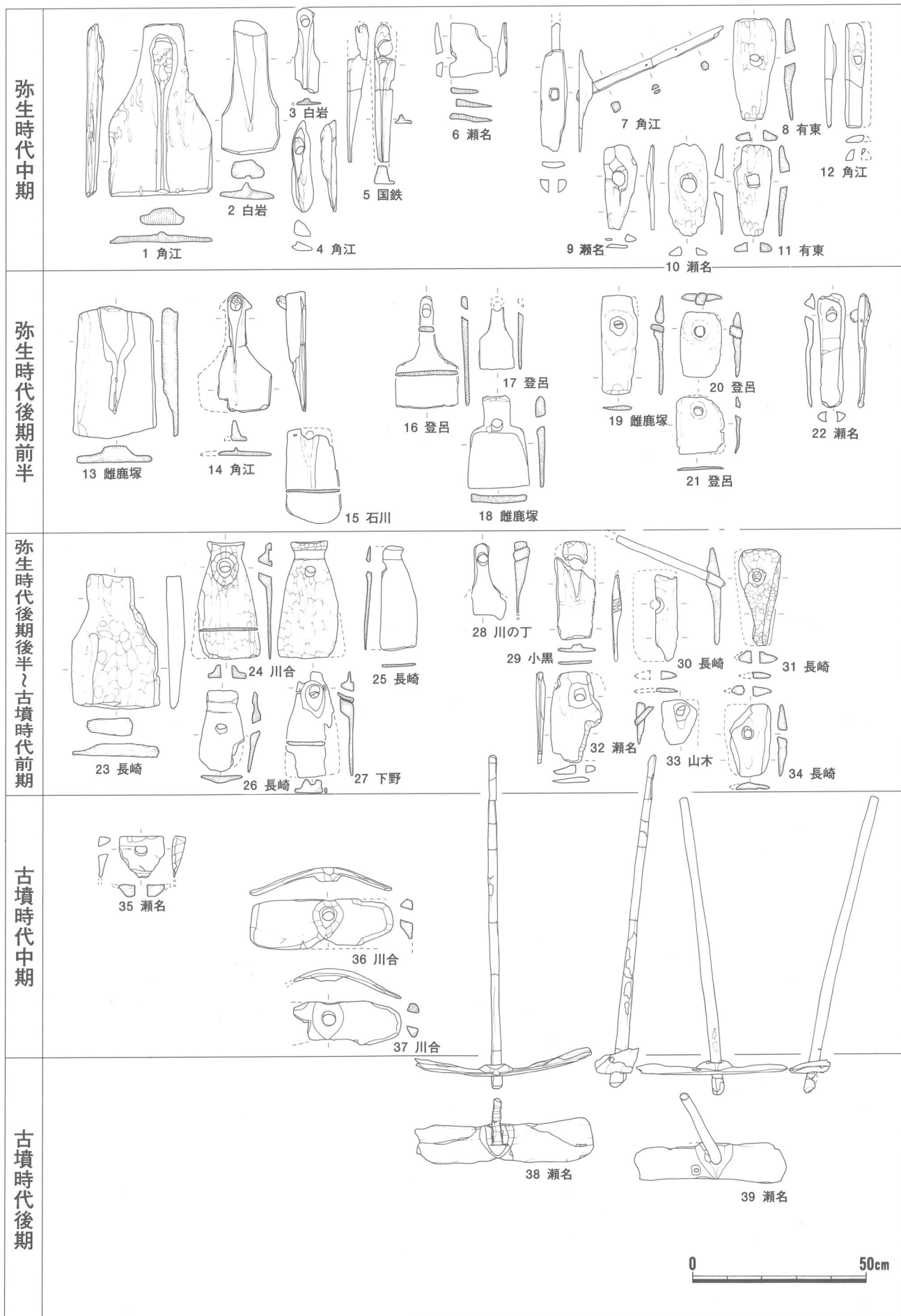
4 静岡県内の鍬の器種とその組成の変化

静岡県下の遺跡より出土した木製農耕具を集成してみた。今後より資料が追加されるであろうが、弥生時代から古墳時代の県内の木製農耕具の変遷は概ね追えるものと思われる。第33図静岡県内の木製農耕具から第38図までを参照していただきたい。既述のように時期は弥生時代中期後半、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期の5つに分けた。ただ古墳時代後期に属する木製農耕具は数少なく、この時期を除いて検討せざるをえないところもある。

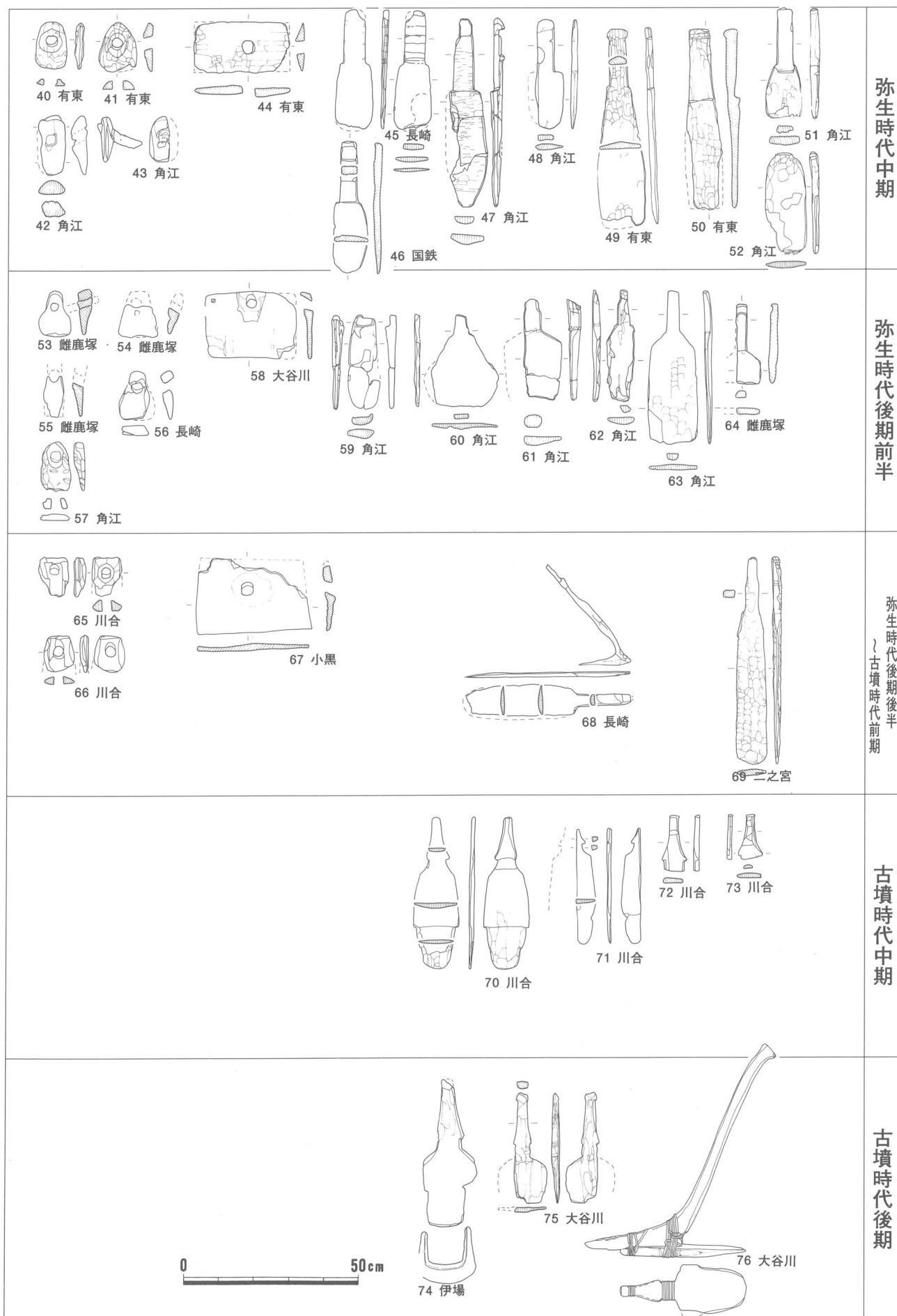
1、2、3、4、13、23は一般的な広鍬で平面が台形を呈するものである。いずれも舟形隆起が明瞭である。1、2、13、23はいずれも未製品で舟形隆起は削り出してあり、肩もおとしているためこの広鍬と判別がつくが柄孔もまだ穿たれておらず、身全体もまた肥厚である。3、4は欠落部分があり、広鍬と断定できず狭鍬になる可能性もある。5は舟形隆起があり狭鍬になるものである。14、24、25、26は平面形か有頭状になる広鍬である。14は柄孔両側に傘状の突起を削り出している。また舟形隆起が明瞭である。24、25、26は上部両側縁をくびれさせ、有頭状にしている。いずれも「蟻じゃくり溝」と呼ばれる泥除け具装着用の溝が柄孔上部にある。これらの着柄隆起は所謂「舟形隆起」と呼べる程明瞭なものではない。15、27は平面が台形で柄孔左右両側付近にやはり泥除け装着用の穿孔がある。16、17、18、28はバチ形の広鍬である。これらの着柄隆起は明瞭でなく、刃先から基部に向かって肥厚していく。7、8、9、10、11、19、20、21、29、30、31、32、33、34は平面が長方形を呈す広鍬である。これらは弥生時代中期後半の資料にも舟形隆起はみられず、柄孔に向かって漸次肥厚する着柄隆起である。広鍬を検討して言えることを拾いあげてみる。明瞭な舟形隆起を持つ広鍬は、弥生時代中期後半からあり、後期前半で消えてしまう。泥除け装着の構造を持つ有頭状の広鍬は、弥生時代後期～古墳時代前期にほぼ限定できよう。バチ形の広鍬は弥生時代後期前半が中心である。平面長方形の広鍬は弥生時代中期後半から古墳時代前期まで、その形態を殆ど変えず継続的に用いられた。

5、12、22は狭鍬である。他の鍬の出土数に比して少ない。40、41、42、43、53、54、55、56、57、65、66は小型鍬である。65、66は川合遺跡出土のものであるが、調査者によると弥生時代後期～古墳時代前期の時期の幅があるという。後期前半に属してもかまわないかもしれない。44、58、67は横鍬である。58は柄孔付近を台形状に厚く削り出している。67は柄孔付近が緩やかに厚くなるようにしている。

45、46、47、48、49、50、51、52、59、60、61、62、63、64は膝柄装着の平鍬である。45、46は着柄軸外側に有段状の緊縛用突起部を削り出しており、樋上昇氏が「東海の膝柄鍬A」と呼ぶ東海地方独自の着柄軸のものである。47、48、49、50、51と弥生時代中期後半のものは着柄軸先端は明瞭に有頭状に削りだしている。47、51は膝柄が当たる部分を身の平坦面より一段落としている。後期前半になると、着柄軸の先端部が明瞭な有頭にならない。また身の平面形が60はオムスビ形、63は長方形と中期後半のような規格性が失なわ

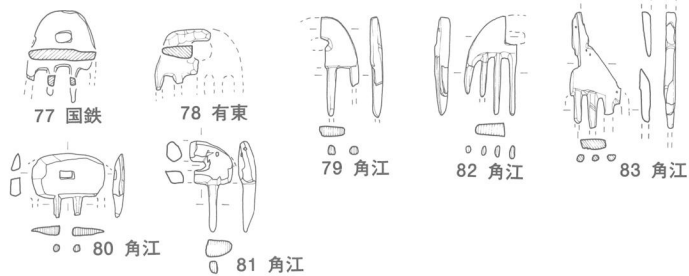


第33図 静岡県内の木製農耕具

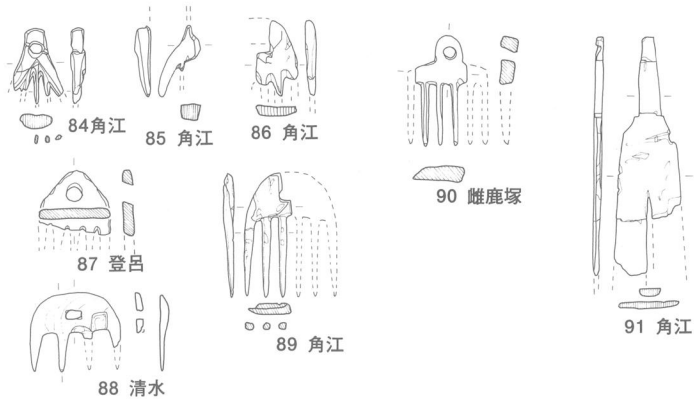


第34図 静岡県内の木製農耕具

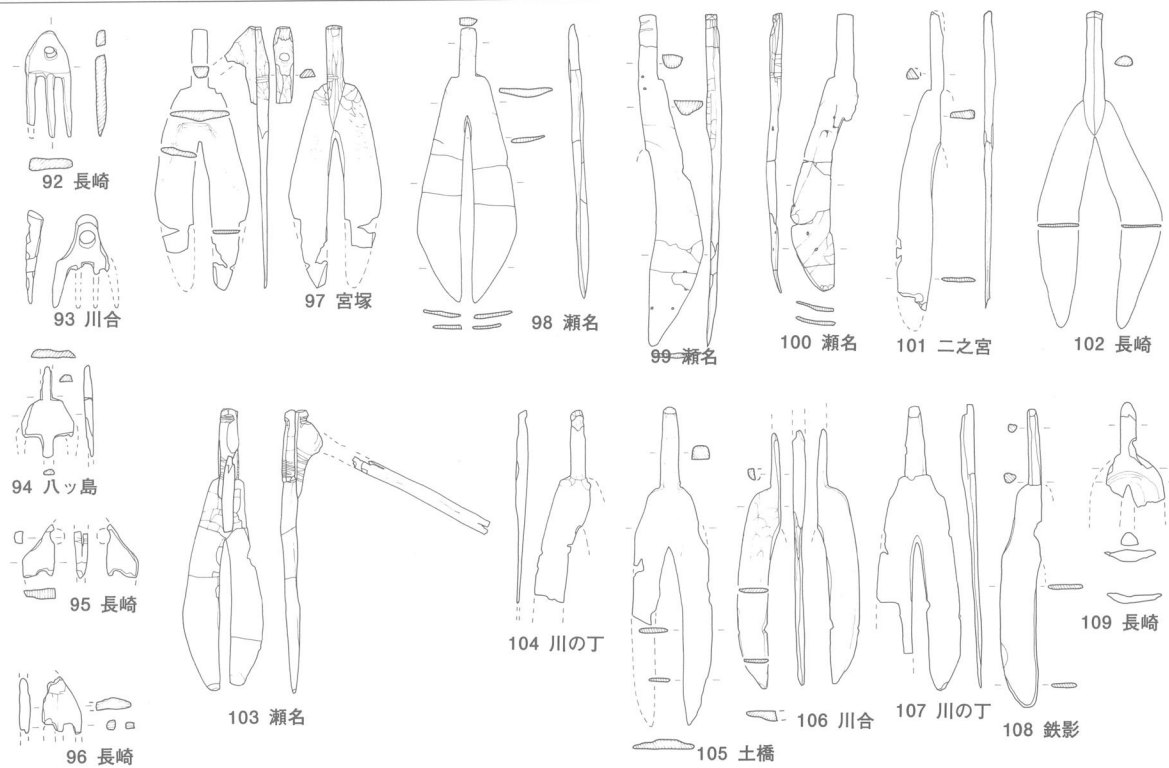
弥生時代中期



弥生時代後期前半

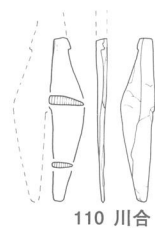


弥生時代後期後半～古墳時代前期

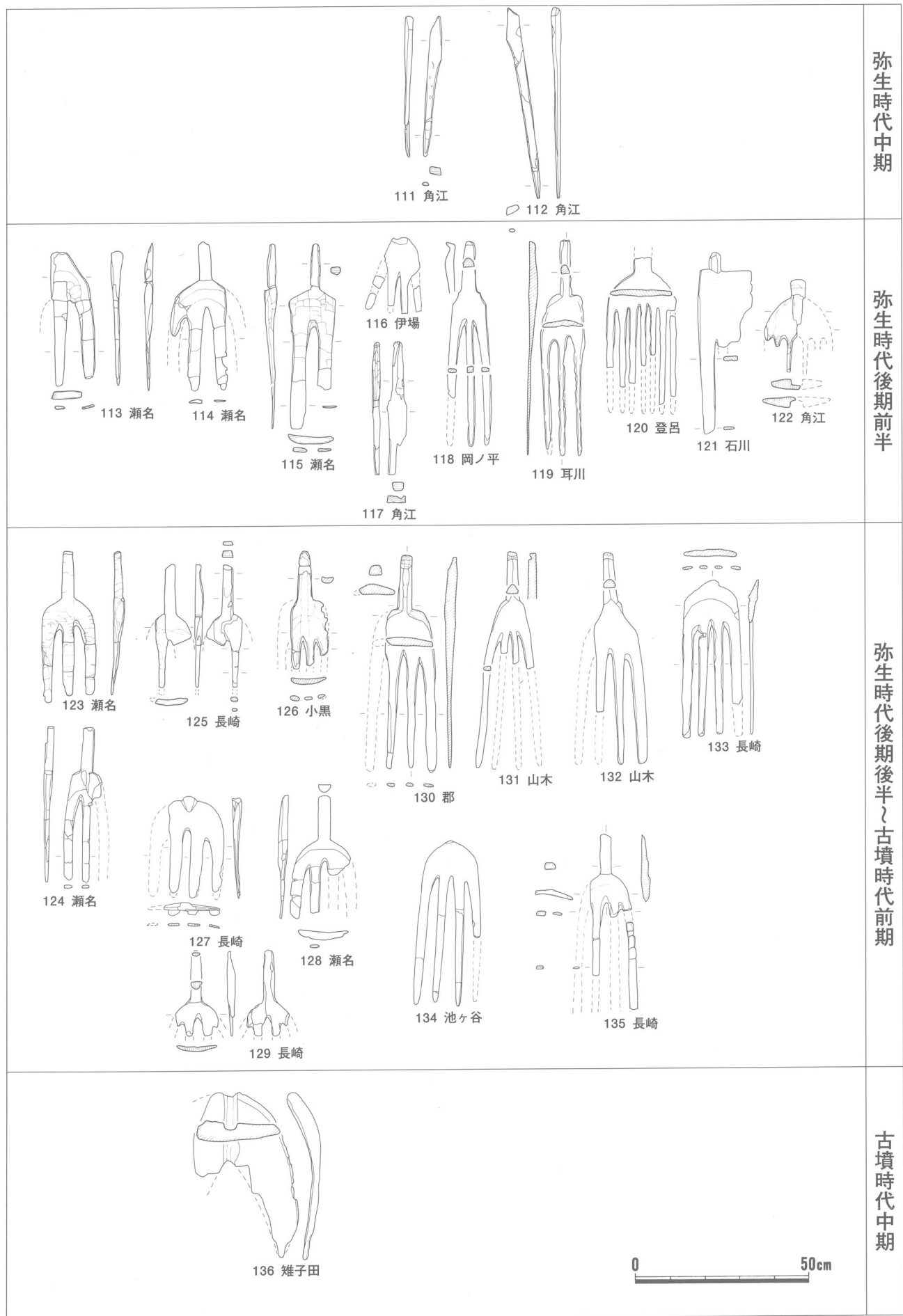


古墳時代中期

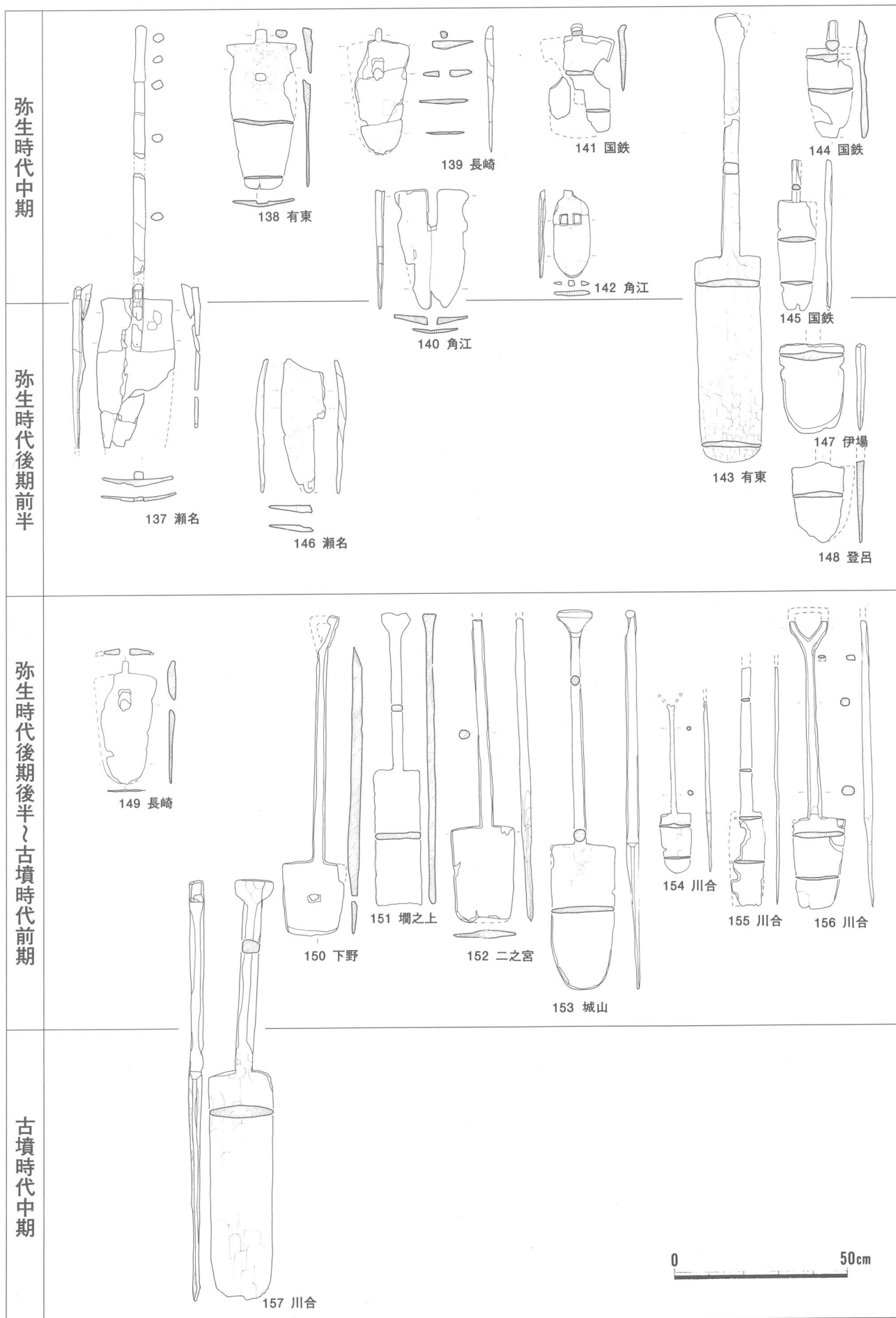
0 50cm



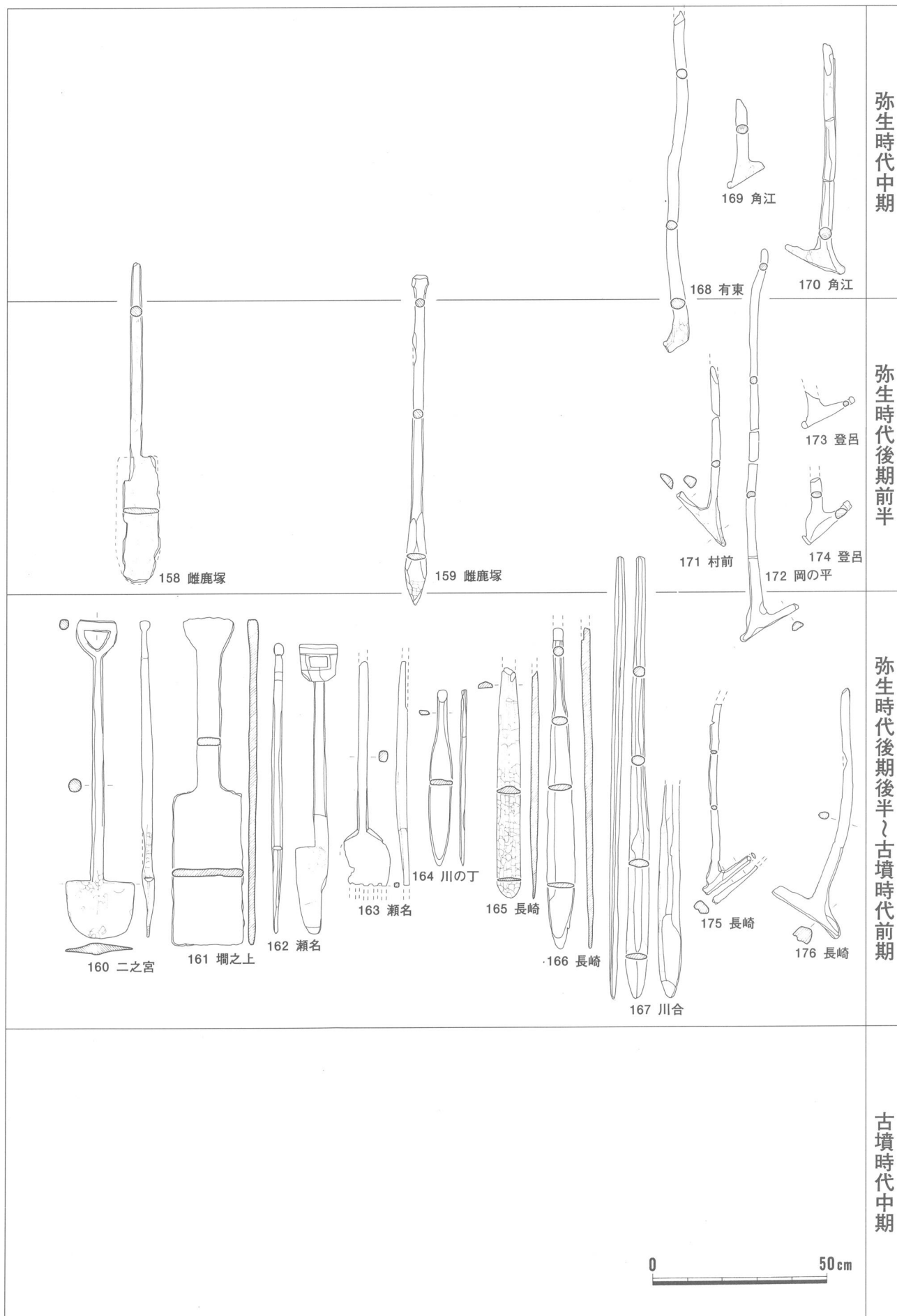
第35図 静岡県内の木製農耕具



第36図 静岡県内の木製農耕具



第37図 静岡県内の木製農耕具



第38図 静岡県内の木製農耕具

れてきているのが了解できる。69は身が59cm程あり、長身の膝柄鋏である。以上膝柄装着の平鋏は中期後半には定型化されたものが現われ、後期前半には平面形がくずれ、後期後半には見当たらないようになってしまう。

36、37、38、39はU字型鉄刃が装着される諸手鋏である。36が身としては残存状態が良く、これから身の形状を類推したい。36は横長に置くと右側にU字型鉄刃が装着され、左側はそのまま木の刃先である。着柄隆起は三角形または、逆水滴状をなし、緩やかな隆起である。着柄隆起の下端は側縁から切り込まれている。柄の装着復元は38を参照したい。この柄孔は正方形で、柄の装着角度はこの復元が正しいと思われる。柄自体は何ヶ所かに折れて出土しているが、柄の装着部は土圧等の影響での変形はなかったと見る。柄は上方(身を横長に置いた位置で)に若干ふれているのが了解できる。つまり、右側のU字型鉄刃を用いる打ち鋏としても用いられ、横長に置いた下端を利用する“エブリ”の機能もあったと推定できるものである。この4例とも古墳時代中期に限定できることに注目したい。他の時期でこれに類した鋏は東海地方では見当たらない。

70、71、72、73、74、75、76は所謂「ナスビ型鋏」である。着柄軸にナスビのヘタ状の突起がつく。いずれもU字型の鉄刃が装着されたナスビ型鋏と考えられる。70は残存状態が良く、明瞭にU字型鉄刃の当たりを削りだしているのが観察できる。松井和幸氏はこのU字型鋏先の出現を大阪府藤井寺市野中古墳出土の鋏先などより5世紀初頭から前葉頃としている(松井 1987)。川合遺跡の70から駿河でも5世紀末にはU字型鋏先が用いられるナスビ型鋏が用いられているのがわかる。74の鋏先は都出比呂志氏の言う「刃先部が直線刃になり、U字形というより凹字形というべきもの」(都出 1967)で、都出氏もやはりこの伊場遺跡のナスビ型鋏を示して論じているように、中期から後期に入り、この「凹字形」の刃先が出現するものと思われる。静岡県内では樋上氏も東海地方の鋏の変遷の中で指摘しているように、ナスビ型の鋏は弥生時代には見られず、古墳時代中期にU字型鉄先を装着するナスビ型が導入される。

77、78、79、80、81、82、84、85、86、87、88、89、90、92、93は柄孔装着の多本鋏である。92が三本歯、77、79、80、81、88、93が四本歯、78、84、87が五本歯、82、89、90が六本歯になる。歯の本数はこのように4本から6本の範囲内にすべてある。この中で84、85、93は「小型多本鋏」と言えるもので、意識的に小さく作り、平面形も柄孔付近の身幅を狭くし、バチ形に近い形にしている。小型鋏とともに特異な形態を示すものである。90も6本歯で、柄孔付近を突出させるように作り出している。多本鋏は基本的には畿内の影響を受け、77、78、79、82、80、81、88、89は上端は半円形で弧を描き、刃の断面もほぼ正方形をするものである。これらは89を除き、上端から刃先まで15cm～20cm程度で、膝柄の又鋏に比して小型であることが注目される。これら定型化された柄孔装着の多本鋏は、弥生時代中期後半および後期前半が中心で、後期後半には、その形も崩れているのが了解できる。78、80、81、82、88、89は柄孔が横長の長方形をしている。やや、隅丸に摩滅はしているものの、これらは柄孔が長方形で、特に中期後半には明らかに円形の柄孔はなく、円形柄孔は後期になって現われるように観察できる。後期後半～古墳時代前期の資料には長方形になるものは見当たらず、長方形柄孔は後期前半で消失すると思われる。

91及び97～109は膝柄装着の二又鋏である。東海地方より南東北(中在家南遺跡)まで広域に分布する鋏である。樋上氏はこれらの鋏を「東海型膝柄鋏」と呼び、畿内の瓜生堂遺跡、池上遺跡で出土している二又の膝柄鋏と別系統として扱っている(樋上 1989)。この「東海型膝柄鋏」は愛知県の勝川遺跡、静岡県では角江遺跡、瀬名遺跡、御殿・二之宮遺跡、長崎遺跡、川の丁遺跡、川合遺跡、土橋遺跡、鋏影遺跡、宮塚遺跡等で出土しており、また長野県の石川条里遺跡、千葉県の手賀沼遺跡、群馬県の新保遺跡、宮城県の中在家南遺跡でも確認されている。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の時代幅で収まる資料である。膝柄緊縛部は断面半円形で棒状に伸び、先端部は裏面のみに有頭状に削り出している。身はほんの1cm程度の肩を設け、両側面は徐々に広がり、中位またはやや下部で最大幅になり、刃

先に向かってやはり弧を描きながら尖る。中央部は刃先より2～4cmと幅狭なスリットが入る。厚さは薄くほぼ完形で出土した98は刃先部で3mm、中央部で6mmと相当薄く仕上がっている。出土した遺跡数から見ても静岡県内では既に9遺跡で確認されており、瀬名遺跡ではこの「東海型二又鍬」は24点もの多数が確認されている。現時点では、静岡県の西部、中部を中心として西は愛知県、東は千葉県、南東北にまで分布していると言えるかもしれない。県内資料では、97～108は弥生時代後期後半から古墳時代前期に限定できる資料で、この時期に定形化された膝柄装着の二又鍬が盛行することが確認できる。91は浜松市角江遺跡の二又鍬で、後期前半とされる。後期前半の出土例として注目される。110はナスビ型鍬が二又に分岐したものと考えられる。

113、123、124は三又の膝柄装着鍬である。123、124は着柄軸の形状が二又鍬と同形である。縦全長が43cm前後と二又鍬や四又鍬に比してやや小型である。114、115、116、117、123、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135は四又の膝柄装着鍬である。着柄軸の形状はやはり二又鍬と同形である。身幅は二又鍬より広く、縦全長は二又鍬に近い。既述のように柄孔装着の多又鍬の刃の断面形が方形に近いのに対し、膝柄装着の又鍬は刃が幅広で薄いのが特徴である。柄孔装着多又鍬は土に突き刺す機能が想定され、また小型であることも考え、碎土に向く形態をしている。膝柄装着の多又鍬は身全体が大きく刃が幅広で薄いことより、粘性のある土を拾い上げ、土塊を移動させる機能を想定することが可能と思われる。111、112、118は膝柄装着の三又の鍬であるが、肩の形状が類似している。また左右は外側に開き先端に至り幅は狭く、厚みが他の膝柄装着の鍬よりある。120は7本歯という特異な多又鍬である。122は6本歯で、短い着柄軸が付くが、身に柄を装着する溝が削り込まれ、裏まで貫通している。この着柄装置だけ見ると、組み合わせ鋤と考えたいが、6本歯であると肩が弧を描いていることなどから、ここでは膝柄装着の多又鍬に入れておくが鋤である可能性は十分にある。今後の類例資料を検討したい。膝柄装着の三又、四又の鍬は弥生時代後期前半より古墳時代前期の時期が中心であることが了解できる。

137、138、139、140、141、142、146、149は組み合わせ鋤の身で、身と柄を別作りし、紐で緊縛するものである。特に今回、瀬名遺跡より出土した137は、柄の形状及び装着方法も復元できる資料である。柄の握りは一木鋤のように三角形またはT字状にはならず、一握分太くした端部を削り出している。身との接合部は嘴状にやや曲がりながら先端部に至り、その曲がり部分を身の装着用の孔にさし込むようになっている。138、139、140、141、147、149はこのように柄が装着されたものと想定する。142は短い着柄軸を持ち、身に2つ長方形の穿孔があり、柄が緊縛されるものとされる。大中の湖遺跡出土の組み合わせ鋤より（水野 1967）この142も組み合わせ鋤とする。ただ、この142は2孔と着柄軸までの間隔が短いため、膝柄を緊縛することも可能である。137、140はそれぞれ、瀬名遺跡、角江遺跡の方形周溝墓の周溝より出土した。農耕具というより土木具としての機能を想定したい。

143、144、145、147、148、150、151、152、153、154、155、156、157、158、160、161、162は一木鋤である。全長が143は135.3cm以上あり、154は48.5cmとバラツキがある。身の平面形もいずれも足が掛かるように肩が直線的に削り出している。143、151、153、161、157は身が長大である。握りの形状は153、157はT字状であり、150、154、156、160は三角形を呈す。151、161は未製品の可能性がある。一木鋤は弥生時代後期後半から古墳時代前期に残存状態の良い資料が多く見られる。静岡県中部の水田を多数検出した瀬名遺跡、長崎遺跡、池ヶ谷遺跡では多種で多数の鍬が出土しながら一木鋤は殆ど見られない。鍬、田下駄が水田遺構に伴い多数出土する状況と違い、鋤の出土状況は明確に水田に伴うと言えるものが少ない（162は水田関連である。）。先述のように、組み合わせ鋤が土木具の機能を果たしていたことから、一木鋤も水田の起耕具としてより土木具としての機能を中心に考えたい。

159、164、165、166、167は櫛状の木製品である。164、165、166はいずれもアカガシ材で出来ており、

第33表 静岡県木製農耕具の器種の消長

		弥生時代中期後半	弥生時代後期前半	弥生時代後期～ 古墳時代初頭	古墳時代中期	古墳時代後期
柄孔狭鋤（舟形隆起）		——	-----			
柄孔長方形狭鋤			——	-----		
柄孔 広鋤	舟形隆起有	——			-----	
	アリジャクリ有		-----	——		
柄孔バチ型広鋤			——	-----		
柄孔長方形広鋤		——		——		
横鋤		——		——		
柄孔小型鋤		——		-----		
柄孔小型多本鋤		——	——			
諸手鋤					——	
柄孔三本鋤			-----	——		
柄孔四本鋤		——		-----		
膝柄狭鋤		——		-----		
膝柄広鋤			——	-----		
膝柄二又鋤			-----	——		
膝柄三又鋤			——	——		
膝柄四又鋤			——	——		
膝柄多又鋤			——	-----		
ナスビ形鋤					——	——
組合せ鋤		——	——	-----		
一本鋤		——	——	——		
權状木製品			-----	——		

159、167も固い広葉樹材である。身の部分の面積が小さいため客土用には向かないが、掘る機能を備えた道具と考えたい。この櫛状木製品も弥生時代後期後半より古墳時代前期の時期幅の中に大半が収まる。⁽¹⁴⁾

168～170は鍬に用いられたと思われる膝柄である。ここで拾い上げたのは、膝頭部分に有頭状の緊縛部を削り出しているものである。弥生時代中期後半から確認でき、古墳時代前期までは明らかに多数存在することがわかっている。膝柄装着の鍬の身の出土数から言って当然の傾向であろう。70、71、72、73、74、75のナスビ形鍬の身には膝柄が装着されるのであろうか、県内資料では確認できない。

5 まとめ

以上、静岡県下の弥生時代から古墳時代の木製農耕具を分類試案に従って検討してみた。その器種の消長を捉えることができるものを選んで第34表にまとめてみた。各時代ごとその器種組成を中心に概観してみる。

<弥生時代中期後半>

静岡県における初期農耕段階で、水田遺構も瀬名遺跡、角江遺跡等に確認されている。大陸系磨製石斧がまだ多数確認できる時期で農耕具は基本的に石器で加工していると考えられる。既に鍬の器種では柄孔装着の狭鍬、広鍬、横鍬、小型鍬、多本鍬、及び膝柄装着の狭鍬と、その後古墳時代前期まで基本となる器種は揃っている。舟形隆起を持った狭鍬が、この時期に確認できる。広鍬では、肩を斜めに落とした明瞭に舟形隆起のあるものが盛行し、平面長方形のものもある。横鍬もある。完成された形の小型鍬がある。膝柄装着の狭鍬では、着柄軸裏面が有段状になるものがあり、有段状にならない通常のものも定型化している。柄孔装着の四本鍬は上端が弧を描き、柄孔が横長長方形又は隅丸長方形になるものが多い。鋤に関しては、鋤が農耕具か土木具かという問題はあるが、当該期は組み合わせ鋤が中心である。丁寧に作られ、完成された型の組み合わせ鋤が目につく。

<弥生時代後期前半>

水田遺構は、登呂遺跡、静清平野を中心に杭列を伴って検出されている。登呂遺跡で鉄片が2、川合遺跡で板状鉄斧が7、雌鹿塚遺跡で棒状鉄片が2確認されており、逆に大陸系磨製石斧が減少することにより、当該期においては、木製品の加工は相当部分鉄器化していると想像できる。基本的な農耕具の組成の変化は少ない。狭鍬は着柄隆起が不明瞭になっている。広鍬は舟形隆起を明瞭にもったものが継続的に作られている。広鍬では、バチ型のものが新たに登場する。平面長方形の広鍬も継続的にある。横鍬も継続的にある。小型鍬は盛行する。柄孔装着の小型の多本鍬がある。中期後半に定型化された上端弧を描く柄孔装着の多本鍬は、この後期前半にもあるが、上端が三角形をしたり、柄孔付近のみ突出したり、不定型になってきている。膝柄装着の狭鍬は中期後半の定型化されたものが、着柄軸の技法や平面形において崩れてきていることが了解できる。着柄軸裏面が有段状になっているもの、太く有段状になって着柄軸をもつものが消失している。膝柄装着の広鍬といえる身幅の広い膝柄鍬が登場している。

膝柄装着の二又鍬の初現が、この時期にある。膝柄装着の三又、四又、多又鍬はほぼすべて出揃っている。組み合わせ鋤は、極端に減少する。一木鋤も、中期後半と同じく少数なら確認できる。櫛状木製品の初現が見られる。

<弥生時代後期後半から古墳時代前期まで>

静清平野のそれも巴川沿いの遺跡（長崎遺跡、川合遺跡、瀬名遺跡）では大規模な杭打ちの畦畔を伴った明瞭な水田遺構が確認できる時期である。県下出土の木製品の総数も、当該期が圧倒的に多い。加工具は概ね完全に鉄器化している。木製農耕具の器種組成は古代において、最も充実する時期に当たる。

柄孔装着の狭鍬は殆ど見当たらない。広鍬において、舟形隆起が消滅しており、柄孔付近も円形に隆起させていたり、漸次隆起させるに留まる不明確な隆起である。泥除け装置が設けられ、平面有頭状に

なっている広鋏には上辺近く横位に溝が彫られていたり、柄孔両側に穿孔があったりする。パチ型は減少する。平面長方形の鋏は継続的に作られる。小型鋏は明確には言えないが、減少または消滅していると考えたい。横鋏はまだ存続している。膝柄装着の多本鋏も不定型ながら若干残る。

明確に膝柄狭鋏といえるものは長崎遺跡の一点を除くと殆ど見あたらなくなり、身長のものが残る。膝柄装着の二又鋏は圧倒的多数を占めるようになる。形状も安定し、定型化している。三又、四又鋏も二又鋏同様定型化し、多数出土している。農耕具の中ではこれら膝柄装着の二又、三又、四又鋏が当該期、中心的な木製農耕具であったことが了解できる。

組み合わせ鋤は1例確認されているが、ほぼ消滅に近い状態であったであろう。一方、一本鋤は隆盛を極める。大きさ、平面形にバラツキがあるものの数的には他の時期と比較にならぬほど、多数確認できる。櫛状木製品も一本鋤同様当該期が中心となる。

＜古墳時代中期＞

前の弥生時代後期後半から古墳時代前期までの木製品の農耕具の組成はこの時期に来て、ドラスティックな変化を迎える。中期古墳より鉄製の方形鋏先、U字型鋏先（U字型は後期古墳より多数出土する）、鉄鎌が出土している。古墳時代前期までその系譜を辿ることが出来た鋏、鋤の大半は当該時期においては殆ど消滅してしまっている。全く別系譜の鉄刃装着の諸手鋏が出現している。また、U字型鉄刃装着のナスビ型鋏が出現している。他の器種は殆ど確認できていない。ナスビ型鋏は平安時代前半までその系譜が続くが、諸手鋏は当該期のみで消滅してしまう。刃先に鉄が用いられることにより、それまでの木製農耕具はその器種組成を全く変えてしまうことが了解できよう。

＜古墳時代後期＞

古墳時代中期もそうであるが、当該期の水田遺構は時期限定してなかなか検出されていないのが実状である。木製品全体を通じて、当該期のものと限定して考えることができるものは希有である。後期古墳からは、鎌及びU字型鉄製鋏先が多数確認されており、一般的にもU字型鋏先を装着した鋏が浸透していた。ここでは風呂鋏である（U字型鉄刃装着の）ナスビ型鋏が確認できる。

以上各時代の概観で了解できたように、古墳時代前期と中期との間断の大きさがあまりにも明瞭である。初期農耕段階の弥生時代中期後半に畿内の影響を受け、多くの器種を揃えて導入された木製農耕具の組成は、弥生時代後期前半、後期後半、古墳時代前期と地方色のある形態を生み出したり、部分的な消失を招いたりするものの、基本的には、その組成の大枠をほとんど変えずにきた。それが、古墳時代中期に入ると、木製農耕具の刃先に鉄器が用いられることにより、それまでの組成の殆どを捨て去り、地域色の強い諸手鋏と畿内の影響を受けたナスビ型鋏が出現するという構造的変化がもたらされた。

静岡県内の木製農耕具を追うことをしただけでも、時代による形態差、形態的地域色、機能的形態差が少しずつ読みとることが可能である。

（中山正典）

〔註〕

- (1) 西部において今回は瓜郷式、長床式、下長山式の時期幅の木製品をこの時期に一括して扱った。今後、少なくとも瓜郷式の時期と長床式の時期を分けて論ずる時が来るであろう。
- (2) 山木遺跡を弥生時代後期とする説（『蜷山町史』第1巻）もあるが『静岡県史資料編1考古』等は、住居跡は古墳時代前期のものであるとし、遺物は弥生時代後期から古墳時代前期のものとしている。後者の説にここでは従う。
- (3) 『伊場遺跡遺物編I』では「可能な限りの推測も加えつつ次のような機能分類を行い、用途不明の資料については形態分類を行うことにした。」と記述している。
- (4) ここでは古墳時代の木製遺物を多少なりとも含む遺物を中心に述べた。当然、城山遺跡（浜松市）、郡遺跡（藤枝市）、御殿川流域遺跡群（三島市）等はその理由により、ここでは触れなかった。
- (5) 木下忠氏は「農耕具は刃先まで木製であるとはいえ、すでに弥生文化形成の当初から平鋏、股鋏、鋤など機能に応じて分化していた。」と説く。器種の分化の背景に必ず機能差があるという視点で、農耕具の研究は木下氏によって行われた。今一度この視点に立つことの重要性を感じる。
- (6) 民具学の領域においても鋏は全国を視野に入れた機能分類がなされていない。全国を視野に入ると『日本の鎌・鋏・犁』（財農政調査会 1979）のように「肥後鋏」というように地方名を冠した鋏とか「六本熊手鋏」というように形態的に特徴を有する鋏など

- に分類し、まとめる他ないのが実状であろう。
- (7) この柄の装着方法で鍬を2分する研究は、上原真人氏(上原 1991)や樋上昇氏(樋上 1990)等が進めている。曲柄は膝柄、反柄の両者を含むものとして、ここでは用いさせてもらった。「柄孔装着」とは、一般的でないかもしれない。「柄孔装着」については、まだ研究者によって呼称が違うのが現状であろう。
- (8) ナスピ型鍬の静岡県下における下限は、池ヶ谷遺跡出土のナスビの傘が退化した鍬をもってする。この鍬はDⅢ層畦畔中よりの出土でこのDⅢ層中より伊豆神津島天上山の火山灰(838年に噴火)が検出されている。
- (9) 「蟻じゃくり」は鍬の泥除けを意味する。本報告では奈良時代以後、静清平野で確認できる2枚の板を綴じ合わせる歴史時代の泥除けとは別系譜のものとする。この弥生時代の泥除けと歴史時代の泥除けとは、機能的には同じであるが、形態上からも、装着方法からも、出現系譜からも別の系譜のものであろう。
- (10) 民具例の備中鍬の中でも、大型のものは荒起こしに用い、小型の軽い備中鍬は碎土に用いる例がある(『日本の鎌、鍬、犁』)。多本鍬・多又鍬は刃の断面形とともに、平面形の大きさにも機能が反映していると考えたい。
- (11) ナスピ型鍬に反柄が装着される典型的な例が神明原・元宮川遺跡(静岡)で出土している。その他、反柄の例としては、針江中遺跡(滋賀県)、服部遺跡(滋賀県)などを挙げることができる。
- (12) 弥生時代中期後半においては柄孔装着の広鍬がいわゆる広鍬としての機能を果たし、膝柄装着鍬は身幅が狭いことから狭鍬としての機能を果たしていたかもしれない。
- (13) 柄孔が方形なのは、4例中38のみである。円形の柄孔に挿入されて土中に埋まったものより、方形の柄孔に断面方形の柄が挿入されている方が、土圧等の諸条件による変形、柄のズレは少ないと考える。
- (14) 針葉樹(スギ材が多い)の櫓状をする木製品は多いが、ここでは扱わなかった。針葉樹材の農耕具は考えられず、県内特に中部においては農耕具の大半はアカガシであるように固い広葉樹材を選別していると考えられる。

<引用・参考文献>

- 後藤守一 1962年 『韮山村山木遺跡』 『韮山町史』第1巻所収
- 斎藤 宏 1967年 『伊豆韮山宮下遺跡』 『韮山町史』第2巻所収
- 木下 忠 1966年 『農具』 『日本の考古学Ⅳ 弥生時代』 河出書房
- 木下 忠 1985年 『日本農耕技術の起源と伝統』 雄山閣
- 都出比呂志 1967年 『農具鉄器化の二つの画期』 『考古学研究』13-3
- 都出比呂志 1989年 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
- 黒崎 直 1970年 『木製農耕具の性格と弥生社会の動向』 『考古学研究』16-3
- 黒崎 直 1976年 『古墳時代の農耕具-ナスビ形着柄鍬を中心として-』 『研究論集Ⅲ』 奈良国立文化財研究所学報第28冊
- 黒崎 直 1985年 『農具 くわとすき』 『弥生文化の研究5 道具と技術Ⅰ』 雄山閣
- 黒崎 直 1988年 『西日本における弥生時代農具の変遷と展開』 日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム『日本における稲作農耕の起源と展開-資料集-』
- 根木 修 1976年 『木製農耕具の意義』 『考古学研究』22-4
- 鈴木隆夫 1978年 『着柄鍬の出土』 『静岡県考古学研究Ⅰ』
- 町田 章 1980年 『古墳時代農耕具の問題点』 『平城宮発掘調査報告Ⅹ』 奈良国立文化財研究所学報第39冊
- 乙益重隆 1992年 『弥生農業と埋納習俗』 六興出版
- 乙益重隆・大場磐雄 1980年 『上総 菅生遺跡』 中央公論 美術出版
- 小林行雄・末永雅雄 1942年 『木器類及び植物製品』 『大和唐古弥生式遺跡の研究』 京都帝国大学考古学研究報告第16冊
- 山田昌久 1982年 『木工技術の変化と特徴的な着柄鍬・鍬について』 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『日高遺跡』
- 山田昌久 1986年 『くわとすきの来た道』 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』
- 川越哲志 1983年 『弥生時代の鉄刀農耕具』 『日本製鉄史論集』たたら研究会
- 岩崎卓也 1985年 『鉄製鍬・鋤先の周辺』 『日本史の黎明-八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版
- 松井和幸 1987年 『日本古代の鉄製鍬先、鋤先について』 『考古学雑誌』72-3
- 木村有作 1988年 『東海地方出土の弥生時代木製品について』 『月刊考古学ジャーナル』292号 ニューサイエンス社
- 樋上 昇 1989年 『木製農耕具の地域色とその変遷』 『年報昭和63年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上 昇 1990年 『弥生時代中期における木製農耕具の器種組成について』 『岡島遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上 昇 1993年 『木製農耕具研究の一視点』 『考古学フォーラム』3 考古学フォーラム
- 平野吾郎 1990年 『東海地方における水稲耕作の開始について』 『研究紀要Ⅲ』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 上原真人 1991年 『農具の変遷-鍬と鋤-』 『季刊 考古学』第37号
- 斎野裕彦 1991年 『東日本への稲作伝播を考える』 『考古学ジャーナル9月号』337号 ニューサイエンス社
- 工藤哲司・荒井格 1990年 『仙台市中南在家遺跡出土の木製品』 『考古学ジャーナル』323号 ニューサイエンス社
- 吉田秀則 1990年 『弥生時代-古墳時代の木製農耕具について-滋賀県下の動向-』 『紀要』第4号(財)滋賀県文化財保存協会
- 田中義昭 1983年 『古代農業の技術と展開』 『講座・日本技術の社会史 第1巻 農業・農産加工』 日本評論社
- 白居直之 1993年 『善光寺平の水田遺跡の調査』 『考古学ジャーナル』365号 ニューサイエンス社
- 日本考古学協会 1954年 『登呂 本編』 東京堂出版
- 埋蔵文化財研究会 1983年 『木製農具について』(『埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料』)
- 埋蔵文化財研究会 1991年 『各地域における米づくりの開始』第30回埋蔵文化財研究集会資料
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年 『新保遺跡Ⅰ』関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
- 茂原市教育委員会・(財)長生郡市文化財センター 1993年 『国府関遺跡群』
- (財)長生郡市文化財センター 1991年 『国府関遺跡』『年報 No.5』
- 小坂井町教育委員会 1960年 『篠東第一次調査報告』
- 豊橋市教育委員会 1963年 『瓜郷』
- 知立市教育委員会 1992年 『西中神明社南遺跡』
- 瓜生堂遺跡調査会 1973年 『瓜生堂遺跡Ⅱ』 1982年 『瓜生堂遺跡Ⅳ』
- 愛知県教育委員会 1982年 『朝日遺跡』
- (財)愛知県教育サービスセンター 1984年 『勝川』
- 三重県教育委員会 1980年 『納所遺跡-遺構と遺物-』
- 三重県教育委員会 1981年 『北堀池遺跡発掘調査報告 第1分冊』
- 米原町教育委員会 1988年 『入江内湖遺跡(行司町地区)発掘調査報告書 米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』
- 滋賀県教育委員会 1967年 『大中の湖遺跡調査概要』
- 滋賀県教育委員会 1983年 『針江中遺跡』 『国道161号線バイパス関連調査概要3』
- 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会 1984年 『服部遺跡調査報告書Ⅴ』
- (財)大阪文化財センター 1974年 『池上遺跡 木器編』第1分冊 1978年 『池上遺跡 木器編』第2分冊
- (財)大阪文化財センター 1983年 『亀井』 1984年 『亀井遺跡Ⅱ』
- (財)東大阪市文化財協会 1987年 『鬼虎川の木質遺物-第7次発掘調査報告書第4冊』
- 第2阪和国道内遺跡調査会 1970年 『池上・四ツ池遺跡13』

東大阪市教育委員会他	1988年	『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』
東大阪市教育委員会他	1988年	『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』
岡山県教育委員会	1974年	『上東遺跡の調査』 『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』 岡山県埋蔵文化財調査報告第2集
岡山県教育委員会	1973年	『下市瀬遺跡』 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』
岡山市教育委員会	1971年	『南方遺跡発掘調査概報』
松山市教育委員会	1975年	『福音寺遺跡』 『埋蔵文化財発掘調査概報』 松山市文化財調査報告書Ⅶ
唐津市教育委員会	1982年	『菜畑一佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査一』
長崎県教育委員会	1974年	『里田原遺跡』 長崎県文化財調査報告書第18集
福岡市教育委員会	1983年	『拾六町ツイジ遺跡』
福岡市教育委員会	1977年	『板付周辺遺跡調査報告書(4)』
福岡市教育委員会	1989年	『板付周辺遺跡調査報告書(15)』
静岡県	1990年	『静岡県史 資料編1 考古一』 ぎょうせい
静岡県	1990年	『静岡県史 資料編2 考古二』 ぎょうせい
静岡県	1990年	『静岡県史 資料編3 考古三』 ぎょうせい
静岡県教育委員会	1983年	『有東遺跡Ⅰ』
沼津市教育委員会	1990年	『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』
静岡市教育委員会	1982年	『駿河・豊田遺跡ー静岡市外局建設用地内遺跡発掘調査の報告ー』
静岡市教育委員会	1989年	『有東梶子遺跡Ⅱ 第3次発掘調査報告書』
清水市教育委員会他	1985年	『下野遺跡』
菊川町教育委員会他	1986年	『耳川遺跡(Ⅱ)』
藤枝市教育委員会他	1981年	『上藪田モミダ遺跡 上藪田川の丁遺跡 島内遺跡』
藤枝市教育委員会	1986年	『郡遺跡発掘調査概報Ⅲ』
袋井市教育委員会他	1985年	『土橋遺跡ー基礎資料編ー』
袋井市教育委員会	1991年	『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』
磐田市教育委員会	1991年	『御殿・二之宮遺跡 市立二之宮保育園建設に伴う発掘調査報告書』
浜松市教育委員会	1978年	『伊場遺跡・遺物編Ⅰ』
浜松市遺跡調査会	1983年	『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡第Ⅳ次発掘調査概要』
(財)浜松市文化協会	1991年	『梶子遺跡Ⅶ』
韭山町教育委員会	1969年	『山木遺跡ー第二次調査概報ー』 『韭山町史』 第1巻所収
韭山町教育委員会	1976年	『山木遺跡ー第三次調査概報ー』 『韭山町史』 第1巻所収
韭山町教育委員会	1977年	『山木遺跡第四次調査報告書』 『韭山町史』 第1巻所収
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1988年	『瀬名遺跡調査概報』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1989年	『瀬名遺跡調査概報』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1991年	『瀬名遺跡調査概報』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1989年	『大谷川Ⅳ(遺物・考察編)』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1989年	『池ヶ谷遺跡調査概報』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1991年	『池ヶ谷遺跡調査概報』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1991年	『角江遺跡』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1992年	『角江遺跡調査概報』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1991年	『長崎遺跡Ⅰ(遺構編)』